

# 農村の人づくり

## ——目標とする新しい農業者像——

経済の高度成長にともない、農家のあつぎを含む労働力の急激な流出によって、就業構造は劣弱化する一方兼業化が進んでいる。しかし、農業労働力の流出は農業近代化の契機になるとも考えられるが、ここで残る人（農業後継者）と残っていない人（農業既就業者）の質に問題がある。そこで農村の人づくりということが重要となってくるが、その場合、目標とする「新しい農業者像」とは一体どのようなものであろうか。一口に言えば、企業者の能力と技術者の能力を兼ね備えた近代農業の経営能力を持っている人で、言葉を変えて言えば、幅広い教養と技術を兼ね備え、農業を平面的でなく立体的に理解し、経営三要素のしくみを発展的に変えることを工夫するような型「構造型」の人である。そこで今後は、農業後継者の確保をはかるとともに、農業に関する学校教育、および社会教育の強化という点で、

一、新規就業者に対する自立経営者教育と組織化

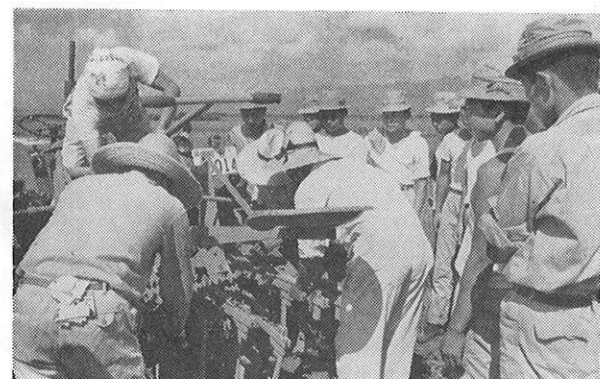
二、現在の経営主ならびに若い農業従事者の再教育と組織化を強力に推進することとするが、個々の施策だけでは不十分であるので、

- A 新しい近代的農村環境の実現
- B 新しい企業者的感覚と創造力のある農業者の育成と組織化
- C 新しい希望と意欲の集団の高揚
- D 新しい自立農業経営の育成と協業化の促進

## 生産の拡大と生産性の向上

生産の選択的拡大については、国の需要や生産の長期見通しを考慮するとともに、本県の立地条件と個別経営の作目編成を再検討の上、基幹作物を選定し、主産地形成をはかるが、基本的な方向は次のとおりである。

米は全国的視点からは長期的には需給の均衡をはかることが可能とされているが、本県における基盤作物であり、農業所得に占める比重も高いので、その重要性を再確認し、生産性の向上と品質改善



農業機械の実習に取りくむ農村青年

を中心として生産の合理的拡大をはかる。また、今後需要の増加が期待される果実、畜産物（乳、肉、卵）など成長部門の飛躍的な拡大をはかるとともに、輸入依存度の高いもの、コストの割高なもの、県の総産出額に占める比重が低いものつまり小麦、大麦、とうもろこし、たまねぎなどについてはコストの引下げを、さらに成長作物と競合し、収益性の低い陸稲、甘しよ、麦類、その他雑穀などは作付面積を縮小し、特に裸麦は積極的に

表4 畜産主産地形成の目標と主要地帯

区分	畜産主産地の要件（市町村単位）		主要地帯
	現在飼養頭数	形成目標	
乳用牛	300	1,000以上	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
肉用牛	1,500	2,000	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
肥育牛	1,000	2,600	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
豚	1,500	4,000	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
鶏	30,000	100,000	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
食鶏	45,000	120,000	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）
肉めん羊	1,000	3,000	阿蘇地域（阿蘇市、阿蘇郡、宇都宮市、鹿野町、熊本市）

（昭三十七）が飼育されているが、問題点も多く、特に畜産そのものが前近代のためため今後は農業近代化の路線に乗せた畜産経営に移行しなければならぬ。

今後の家畜増殖目標（昭四十五）を、乳用牛四万五千頭、肉用牛一三万五千頭、肉豚一八頭、鶏三千三百五十五羽などに、畜産物生産額の見直しを百七億六千五百万円におき、1. 用畜の選択的拡大（主産地形成）2. 自給飼料基盤の確立（草地改良事業の推進、飼料作物の計画的栽培普及、流通飼料の品質改善）、3. 畜産経営の近代化（多頭飼育の促進、協

業化共同化の促進、省力化）4. 家畜の改良促進と生産率の向上を柱に施策を講ずる。

果樹は増反の一端を担い、昭和三十三年の植栽面積は一万一〇〇〇ヘクタール、生産額は三億圓に達したが、新植が多いため現在のお生産額は少なく一戸当り経営規模も小さい。農林省の長期見直しによる昭和四十六年にお供給が不足する見通しであるが、全国的な果樹の増殖傾向や、貿易自由化を考えると将来の果実生産はかなりのきびしいものが予想され、国内産地間競争の激化により価格はさらに低落するものと考えられる。従って、今後は産地間競争に耐えうるだけの強力な果樹農家と生産団地を育成するため、積極的に近代化を推進してコストの引き下げにつとめる必要がある。本県は、気象土地などの立地条件が甘きつ栽培に適し、また栗は内陸地帯に広大な適地があるので、今後の増殖は、柑きつ類と栗に重点をおき、経営規模の拡大、施設の近代化などにより国の果樹施策と相まって九州果樹農業の主体県として主産地形成（果樹大集団産地一九）を推進する。このため、昭和四十五年までに二万ヘクタールの植栽を計画し、生産の合理化と商品性の向上に努め、果樹農業の高度安定をはかることとする。

そのため、①大集団産地の造成（主産地形成）②果樹園経営計画の樹立促進と経営規模の拡大、近代化③用地対策④生産組織の強化⑤新技術の開発と指導⑥生産性の向上と労働対策などを強力に推進する。

そさいは作付面積一万九千二百〇〇ヘクタール、生産量三〇万八千トンの栽培は高冷地から無霜地帯まで時期的にも、品目的にも多彩な産地基盤の上に立っている。これは強味である反面複雑多岐にわたるため大型化した市場の要求にこたえるには立ちおくれを示している。

今後そさいの需要見直しは、高級そさい類、加工用そさいの伸びが大きくなると思われる、交通の発達による輸送時間の短縮や生産資材の進歩などにより栽培地帯が拡大され、産地間競争はますます激化しつつあるので、立地条件を生かした生産、出荷体制の強化が重要視される。

したがって、①主産地形成と共販体制の確立②経営組織および指導体制の強化③加工用そさい計画的栽培のための施策を強力に推進する。

工芸作物については特に、なたねの省力多収栽培の確立、たばこ作の拡大と技術の改善、い草の品質改善、省力栽培と協業化の助長、茶の品種改善と販路の拡大などを考える。

岱明村に完成したみかんの集団産地・中央幹線はトラックも楽に入れる。



作付転換策を講ずる。

次に農業の生産性を高めるための必要な条件として、農用地の流動化とそれを可能にする経済的条件の確立、農業生産基盤の整備開発、農家戸数または労働力の減少による単位当り農用地面積の拡大、農業生産活動の大規模化、経営組織の単純化均一化、革新技術体系の確立と技術水準の平準化、農業経営者の能力向上と組織化、そのほか地力の維持増進病害虫防除などがあるが、これらを積極的につくり出し、生産性の向上をはかることとする。

以上、生産の選択的拡大と生産性の向上について総合的にみてみたが、各作目別にみた場合はどうか。

水稲は、作付面積七万七千三〇〇ヘクタール、生産量三〇万七千ト、生産額二百三億圓（昭三十七）で農業総生産額の約四〇%を占めているが、今後は、限られた労働力によって伝統的な稲作偏重の農業経営を他の農業部門特に成長部門とくに合理的に関連させながら地域的改変を行なうかが主要な課題となっているので、反収一〇%増、反当り投下労働時間三八%程度短縮を目標に、1. 新生産体制（集団栽培）の確立 2. 機械化、省力稲作体系の普及、3. 肥後米の声高揚を中心に推進する。畜産は、乳用牛二万六千二〇〇頭、肉用牛二万八千五〇〇頭、豚一〇万一千頭、鶏一八五万羽を主体に家畜単位にして二二万五千頭